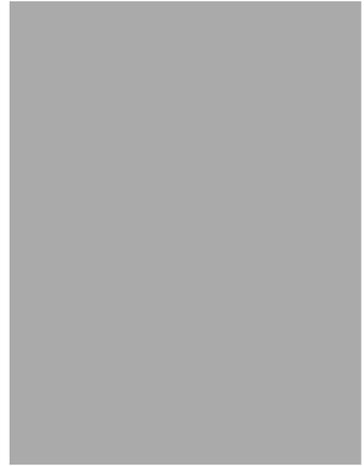


戦没画学生慰霊美術館

@Ueda

1 年前のこの梅雨の季節に、わたしは日本に居た。梅雨の東京は苦手だ。高温多湿で、すべての有機物にかびが生え、緩慢に腐敗していくように感じられる。この時季に日本に行ったのは、二つの学会での報告があったからだ。それでも、報告と報告の合間に、わたしは東京を脱け出した。

長野新幹線を上田で降りた。目的地は、長野県上田市にある「無言館」(戦没画学生慰霊美術館)である。建物の設計は、ちよつとヨーロッパの僧院を髣髴させた。「無言館」は、1997年5月に開館された美術館だ。戦没画学生100余名の遺作品が集められている。裸婦の絵があった。



戦没画学生慰霊美術館「無言館」

写真提供：無言館

「生きて帰ってきたら必ずこの絵の続きを描くから」

東京美術学校油絵科を繰り上げ卒業させられた日高安典は、モデルをつとめてくれた恋人にそう言い残し入営した。1945年4月19日、ルソン島バギオにて戦死。享年27歳。

家族団欒の絵がある。

伊澤洋の作品だ。1939年東京美術学校入学。41年歩兵第六六連隊に入隊し、満州、香港、ラバウル、ニューギニア、ラエと転戦。43年激戦地となった東部ニューギニアのカミアダム高地において戦死。享年26歳。

栃木にある生家の庭には、洋を東京美術学校にイれるために売った樫の大木の切り株が、現在でも残されているそうだ。

可憐なのに艶やかな野ゆりの絵がある。

作者は益田隆雄。1943年多摩帝国美術学校入学。翌44年同校は戦況の悪化にともない閉鎖。召集され満州に出征。敗戦後の46年2月、関東第57陸軍病

院にて戦病死。享年21歳。

この際、作品としての完成度は問題とならないだろう。可能性を無限に秘めた才能が、戦争によって虫けらのように抹殺された。館内は、静寂が支配する。絵から絵へ移動するときを立てるこつそりとした足音すら、高く響く。「無言館」。無言なのに、そこから発せられるメッセージは、熱くそして強靱だった。

知り合いの編集者の車で、佐久市望月町に向かった。望月町は江戸時代の中仙道にあった宿場町である。東京のよどんだそれとは明らかに異なる高地の空気は、雨上がりにきりりと引き締まっていた。

見晴らしのよい場所で車を停めた。小鳥のさえずりしか、聞こえない。時々響くかん高い鳴き声は、百舌のものなのだろうか。鬱蒼とした森林が、視界の限り続く。その日は、春日温泉に泊まった。温泉に浸かりながら夜空を見上げると、雨雲の切れ間から、上弦の月がきらきらと輝いていた。

